

惠通寮日記

自一九四五年六月八
至一九四六年五月七

（万葉集 卷十一）
君王トテ念ふ
山嵐吹く
あしひきの
窓に月おし照りて

北海道帝國大學 豫科
醫類 一年三組

細野 順三



六月十二日 (火)

晴時々曇、雨模様

四朗より来信あり、空襲の状況を詳に報告あり
讀むに予湛、慘憺なる横浜の巷

然し彼ら学徒、雄々しく生産戦に敢闘せざるは、
是れ之を戦火後の人心動揺を指揮してある事、
感服せり、それこそ学徒である、痛感し

本日三時四十分より五時四十分まで、寮特別アルバイト
猛バイトで、夕暮を覚悟中

明日は、寮歌祭、大にバイト出まへし

六月十三日 水 晴

又おぶりの快晴、気分良し、午箱の嶺も美安と現じ
見渡す若草原も崩れて、前年群も嬉々として
更は何とも言へる、爽やかな気分を湧かす

寮歌祭は明日、大黒代ラダラと持参せしる
又おぶりのラダラは、望郷の念を泣きさす

七ヶ報通後、神留特攻隊出撃の録音を聞く
出撃前夜の荒鷲達の、快且る語声、嗚々、神鷲
の、崇高な姿、涼り

こゝで十三号は、名実共に「南寮」線を行く事になる
文化施設完備、娯楽施設万全、快適、十三号

六月十四日 木 曇後雨

符望、寮歌祭、南寮、藤若の縁、生命の争闘
「別離の歌、津軽の海」を歌ふ、大アルバイト

全部合格、万々、快適
長本陽、片山、山田より来信あり、快調

手紙と云ふ奴は、誰から来ても、何れ来ても、嬉しものぞ
その事と云ふと、来てつく、と、感心
筆不精、なして言ふ言葉は、成りしものぞ

六月十八日 月曜日 晴天風強シ

愈々其處此處の谷間に鈴蘭が咲き出した
北海道と言ふと此の鈴蘭を想ひ出す

白く小さな可憐な花よ 愛の表徴!

私はこの鈴蘭に言ひ知れぬ 愛を感ずる

そと 高貴なる重 鈴蘭は私の好きな花の

一つだ 机の上にこの花を 植ゑて 静かな宵

独り 燈を守るのは此の頃の 私の果しみの一つに

なぞある ふくよかな香りは ほとよとよく 疲れる

私の頭腦を よりはつとんと してさるる

たしかに六月の北海道は 鈴蘭が明け 鈴蘭

に暮れる 鈴蘭こそ 北海道とは切ても

切れる縁がある花ぞ

本日午名 アルバイト カニ農場

それをして 翌明後日の 北寮対南寮の

野球試合の 練習を行ふ

此項は運動に快適の季節と 感じられて

よく運動をやる ヒンポン テニス 野球と

一通りのスポーツを 勉強しよう

六月二十二日 金 快晴

又方ぶりの快晴 気分良好

望生 星の性に目覚める頃 完結す 多感なり

幼年時代の彼の 悲しき日常と 少女の死に対する

彼の悼詩は 特に感激す

本日 木下 斎藤 横田 細野正 吾氏 壽可やに行き

君、五好宛 食ふ三由 恐入る

今と後は 大洗浦 遂に午前中 次没 々々

午名カニ農場アルバイト

南山 島高 藤草 作業

明治四十四年十月三日 私はわ(一)回りの都落をました。越えて十二月
 父なる山平橋莊氏から一封の手紙をうけとる。ひらくとふぢ子は
 賜に病を得て亡くなつた。この記をよんであつた。生前つらくあせ流
 になつた旨を感謝すると書きた。なほふぢ子は「髪長のせいで入
 の二とをよびおひしるに書き添えてあつた。
 私のその手紙を見て烈しく涙を感ぜた。そして船のなかには小なる救ひ主
 である。こゝはあつた。彼女の魂に向つて合掌して

悼詩

ボウシ異なる樹のしるしにわびる。
 ホンタン思は涙は流る。

ホンタン遠く夜思島で矢にまた ホンタン九フ

ひとみは真珠 ホンタン万人に可愛がらぬ

いろはには() うらるるらろ あうらりるゆる

可愛いのその手も遠くどころ

天のはつびとをづね行かんぞ あるものさうせん

あるものをわけて すんめりお宿

ふぢに 来ませんか

ふぢに 来ませんか

これはその当山のあつた雑誌に書きた悼詩の一章である。

(望生摩屋著 或る少年の死までより)

六月二十四日 土 曇り雨

九州より南寮対北寮 野球戦と行ふ 試合する頃

漸く雨至り 各選手 悪条件に耐えて克服して汗闘

す。然しながら南寮に利あらず 悪念憎敗す。

叫びやうやう三三三か

午名の南寮階下 総出勤で寫真撮影 於小松島真館

夜の残念をこぼし 井藤氏社行コンパ 一人一藝マアイト

蘭迎ノ 俺は考行糖と寝台まゝりてやる
横田のジシヤゲは仲の見事 彼やねふおん 盟和る
と、奴が あつた場合 面をこつての活躍はよい
すゝかしく世の中の人を 見たりふりてさ世

昨十三日 午折大量に来る 嬉し
六月二十四日 月 晴

又方ぶりの 波晴めつと夏らしくなつて来玉
草奈に寝て彼方の空を見れば 白雲は静かに流れて
如何にも夏と云ふを感じた

二の日 沖繩戦の大本營奔表あり
遂に全兵力を奪つて 牛島司令官以下総攻撃を
敢行す 噫！ 悲壯なる哉

全沖繩住民又皇口護持の信念の元 総攻撃に参加
しありとの 来る（ま）の遂に至る！

夕方 井藤 今 大黒、木下と 戦局下論
激しく闘ふ 死か生の 青羊の熱情 ほとほと
出で 夏口の情 室中に充つ

午名 武者小路の 友情を 再讀す かつもなす
彼の端震る 筆調には 飽きる
静かな北海道の 大自然に 斯くも 静かに 毎日を送る
自分達の 幸福をがしみ 味はれる

○二の日頃 何と云ふに 落ちつかぬ
心抱きて 淋しくもぞゆ

○梅雨晴れて 五里の林に鳥が泣き
○ 寝て 牛の背中を聖が張る

井藤氏 勇躍 アルバイトに出奔さる。 祈御健康
生活部 非常食糧用として養生一人に対し一斗(米)
免配給了。 善喜姿 歡迎!

七月一日 日曜日 晴

本日 何事もなく終る。 午前中、オニ農場の
特別アルバイト、牧草の畜積作業。
俄然 エキゾチックな 札幌農作風景を雇用す。
午名 横田と三人で街へ出る。 先ず 明治(行を
リンゴジュース 一杯 一人三杯計九杯を
次に 南河へ行く。 のアホのメカ生レ受けて 今日
貝えず。 ヨーダハ 水じり 一人三杯 計一斗十三杯。
今日 水腹 辛い。
親ぐから 末信あり。 昨 三十日の母の末信に
「おぼ 昌孝兄 五三七 菊水号 隊長様」と
某方面に出張しとヒク事。 噂、遂に 養する
兄も征か。 忍鬼少殺の持隊として
作業もそそろも 過り 幼手代かろの兄の
幼影が 走馬燈の如く 喧嘩と
「悪い事もやま。 遊んだ。 あ、俺と 三の合点
「兄貴の事。 鎌倉、大橋、横浜、
最所に遊んだ 野尻の思ふは。 い、兄 多て
リコウに 舞入して。 あ、富屋から 林檎を 取る。
お、帰って来た。 あ、おの事。 汽車の汽笛は 狂
郷愁を 嘆かぬ。 柏原の駅前から 狂
長野の赤いレンの思ふは。 あ、 遊んだ。
誰か 故郷を 思ふは。 カヌーと 湖に 遊んだ。 あ、朝
の一時。 あ、俺は もう 一度 遊んだ。

然らば考て見れば 昌兄はあの時から既に
 この心中に確固たる死生観を抱いて居るからその
 三つを 俺はやるぞ 見貫に負つてにやり投して
 確かに足踏つて二十余年の愉快な生涯は 一月の
 小説に過ぎぬ。面白い正しく強い 兄貴のつて
 その兄が今や 皇口悠久の又と 鎮護せん
 三行の皇口の傳統を 毎護せん 爲に
 学がし 学内も 振り捨てて 今 只一途に
 必々のス義に生まんが爲に
 海軍中尉 細野昌彦 とと 敵艦に碎け散らん
 としてゐる。 あゝ 神島は我が見る
 神島は我が見る
 あゝ 俺の心は 若着かない 寝れる

七月二日 月 快晴 タカより曇

まう七月を 早いものだ。 末道してから 早くも二ヶ月が
 終り生活の 興味も 分る末に。 ホーミングも なるそのめ
 ミン。 ニトから 創 本 購 に入る。 幼子に
 近子の治子より 可憐な文章 来る。 健治よりも未
 早東四つを 業のトと入して 返事出す。
 高等成胎の 熊倉に 構う所の 七郎氏に 尋信す。
 今日 終日 オニ農場アルバイト。 何のめ 今日此頃
 心中。 オニのヨリが 消えぬ。 父 母より 手紙が
 一番 俺に 打撃する。 辛い。
 あん 何のめ 若着かぬ。 フロバーウ 京に 思存分
 寝て 思存分 郷愁に 通る。
 に 四ノ葉を 打ち 打ち 打ち 打ち
 あん 俺は又 スラニアに 陥る 様だ。 畜生ノ

七月五日 木曜日 曇後雨

鈍才会寫真家へ送る

午名 グランドへ行く 一人水9.00 四人 木下春藤 青木庵

計。水9.00 カートリヤス。ス。 鯉三匹 紅本

来る。三十一日の全寮ニシバ。南寮。産物は大体

禾吉と葛吉利 麻或日の休。ニ。 何れも或者少陸

のし。

七月八日 日曜日 曇後雨

午前中はオニ農場のアルバイト 午名は

兼て作業中の宇都宮さんへ訪れる

往路は難航に難航を重ね 二時向を費し

午名二時到着す 広ノヒト 沃野にそり立つ

ザイル牛舎 オランダ風 風車 蕪酒を住ひ

この辺 切つての 大牧場である 酪所も備へて

仲々止ぬ お宅である 俗塵を離れて この別天地に

牛と共に寝る 牛と共に働き 牛と共に起る 生活は

すつきり 僕を気に入ってしまった

噂に聞くと御一家の皆さん 大変良き方ばかりである

遠く人里から離れて 隣の生活はさぞ 不足勝で

あつたが 豊富なミルク バターを 使はれて みるには

流石の予料ケンも 恐縮した

又 今度 知りかけで、ウツルヤ、ヒク お言葉と戴いて

帰る 驟雨 沛然として 至るも 猛ヒツク 一吐向にして 帰

寮す 水より ミルクを飲んで 就床す

不思代 甚 干菓子持参する 多謝

今日の バター作りのお手傳いは 愉快 又ヒカ 貴重なる

経験を得る

七月九日(月) 曇後晴

俺はこの頃スランプに陥つてやうだ

どうも本調子が出ない、奈辺に原因があるかは、

自分でも分らない、只何となく気分がはつてりしない、

高校時代はよくこのやうな事があるものであ

ると車でおねらが俺も遂に一門の高校生

になつたのか、勉強してゐても作業者とやそめて

も、頭の中は、何だか知らぬが空壺だ

だから考へる、考へれば考へる程、分らなく

なつて来る、だから止める、すると元気が出ぬ

家郷の事、未来の事、過去の事が織りなして

往來する、リレーの事、父母、兄の事、旧友

の事が交錯する、噫、俺の頭は駄目

だ、どうしても駄目だ、馬鹿な、

昨日の早都、さんり、果てしなな家庭の零團

気と想ひ出す、い、いな、い、いな、

何をしてあの人、俺が帰る頃になつて、讚美歌

を唄ひ出してをのたう、

牧場の娘、何が、セキ的の懐きとだ

凡ゆる思案が、攪乱して、目茶苦茶になつた

世の中で一番偉い人は、何んぞ人だらう

一休和尚か、丹下左膳か、地球全土と

神様か、今、お中怒りになつて、馬鹿野郎

暗闇にしろ、愉快な、牧草の中で

面白くなる、午名の作業の、趣味が、

思ひ存分、寝てやろ、畜生、趣前の、奴、

世の中にあんな奴、下らぬ、人前、居る、

一層、身、早く、往生、して、よ、

七月十一日 水曜日 晴天

艦載機 延八百機 関東地区に未襲す。

関東西南南部海域に母艦群を置き、主として

同地区の航空基地 戦力と破砕する 目的らしき

形勢 凶に染つた米鬼々やリ口には重おく

切齒するが、漸く近海迄 怒りて来らしめを

我航空・海上勢力の微勢と嘆く

如何に飛機が少くも感ずると共に Bニ九の

戦力爆撃を恐れず、特攻隊の確保増産に

總力を傾注する他に 皇口尾として 祖先に對する

申訳があるまい

島田より来信あり、片山は五日に出発し

小川、中聖、オ山組は富士の野外演習に行き

七月十二日 木曜日 曇

午前中 早野先生の平安朝文講義

午後 吉沢先生の英訳 午名 農場アルバイト

牧草の集積作業 今、五木、横田

斎藤と五人でグラント三階へ行く 齋藤は地下食堂へ

ライカカメラと食器を下り、満腹して帰る

○江類 年日 寺山君 昨日、クライダー訓練中

殉職す 直に大学三上外科に入院

今徳長以下、学内総力を注ぎ、有護の

甲斐なく 本日午名〇時五十五分 絶命

昇天せらる 謹んで哀悼の意を表す

八時半より寮内有志によりて追夜あり

冥福を祈りつつ就床す 若き魂魄よ！ 永へに幸あめり

八月十五日

大東亞戦争此に終戦す

畏くも大詔讀弁する 昭和十六年十二月八日南戦以来

激闘四年有半 遂に敗る!

國敗れて山河あり 今静ろに 遇おし途を顧

みるに 思ひしを思ひ 胸中に往來するのみ

嗚る 悪夢よ 去れ 長き悪夢よ!

永(に)去れ こそと再び 平和を愛する 日本

の 上に訪れる 勿れ!

悪夢より覺めを介口よ 躊躇する 勿れ!

正々堂々と 本来の道と歩むべし

鳴る 響く 悪夢覚醒の鐘の音よ!

長き 大東亞戦争の占領があるであらう

だが 武器を捨てて 悪夢より覺めを 我々の

ホツタの宣言 忠実不履行者でなくてはならぬ

文化國として再び奮起するや!

師るべきは 互勲を誓ひカキ ポツコウ!

赤化救國の流行 偽民主主義を主張者ク

ホツコウを 終戦により 痲痺を 我々の

新なる再建に向て 眞一文字に 進むべき

戦争中の事は 何も云ふまい 只 悪夢よ 去れ

然レシ 今後こそ 思ふ事 爲す事 果敢に

叫ぶ 行動せん ミリタリズムの 七がぞ

再び 日本人は ミリタリズムで 付け付け 駄目ぞク

やま 下更不言は 避けしめやウ

やて 何故敗れしやウ 何が敗れしめぞウ

考究して 見やウ 目覚めたる 大和民族ク

目覚めたる 一歩ぞ!

”幸福なるか否 心の貪しき者 天國はその人のものより
幸福なるか否 悲しむ者 その人の慰めらるらん
幸福なるか否 心の清き者 その人は神を見ん
”

7
數百年間暗雲の如くアジアの國民を包蔽しし内地と習慣とを
是故に斯く如く奇異に脱し得ざる事は將來教育を受くる
學生諸子の胸中に自う崇高なる大志を喚起するに至るべし
青年諸子 紳士ノ、希くは皆諸子の最も誠實に有る力ふる
勤務に大に厚望する所の母國に於て 勤勞と信任と
こそより生ずる榮譽の最高位置に通せんべと勉めよ！
健康を保持し 情慾を制し 從順と勉強の習慣を養ふ
時機に學ぶべきに思はば 學術の何をもと論ぜず 力の及ぶ
限は其の智識と技巧とを求めよ！ 斯のやうにして
諸子は能く重厚の地位に通ずと謂ふべし

— クラーク先生 用校禮送り —

十月二十八日 日曜日

久留りに早都宮と訪れる 快晴調の天気
自轉車と馳こり 懐中にさつま芋ニ三斤
午夜の二回回馳走になり 帰途十時
帰途 太思代宅へ此へり

二十九日 月曜日

一州限ニ州限の 明峯えん 口相変らず
秋山えん 判つてやう 判らぬやうな? ... 五州限の
芳崎えん 猛アいでやる 余り早すぞろぞ
本日 朝 井藤代ヨ帰る 昨夕 木下代帰リ
ニトで 安心した 井藤代のお土産 鯨一尾
少一塩が甘いの事 まで如何にさうや
家へ送りまわす 既月うい

ワ五州より 本科も送別会合 愈々 本科生と
別れるのを 弘平 竹山 芝草の 演説は 感ずる
と云うあり 芝草は 傳統は 輝く 芝草話の 美しさ
夢多(理想)の オアレスであつた その 夢で 南ふよした
諸君が その先輩達の 夢と 迫つて 学問する 故に
こそ 偉大の人物が 生まれるのである と

十月三十一日 水曜日

英訳 斎藤えん ニ州限 原えんの 州南まで 優れてモリアイ
でやま お陰で ガンツ 救済す 三四は 体操
午名の オニ農場 アルバイト ピート抜き 終つて 南瓜の
エッセイ 快遊に 食ふ 夕食名 横田と二人して
太思代宅下 訪内す 芋 南瓜 たらもち (持参)
米(種思) 持参で 彼の 室の ストラで 炊き乍ら
米口せ優の No.1 シェンと 捜す その 彼の 入番の
明治節に 寫生する ころな 七州 歸京
人口調査有り 本日 山高 福山氏 家より 来信あり

直ぐに返信を認め置く。明日は大雨を予言される

さて寝るよとせん。昨夜、南識事は余り面白くなる

就中、土方の聲言の。何故、世丈王に起上る力があるのか

の向題は興味ある。結局、早野さんの朋言で

北天生口由来、中央と遠くかかっているが、風流雅人

めいもヒラがある。各歌が、卒返にそれと示してある。世丈王輩

の中で、政留表に志しを、見せかた、この世丈王

傳統ある。内村の官報の、新渡部と、百傳!

人そらばかりである。この傳統が、直るを、世丈にはあるが

然し今にまると、世丈さう中から、政界に覇を為す者が

おぼる此があるおらう。と、二十に計り、論議、白紙し

十一月一日 木曜日 晴

一限二限、稽して、芽おえ、三限、西おえ

四限は、身体検査、要出無し、午名の筆を休講

フライ、快適!、そこで、帰寮と、エッセイを會ひ

又々、横田の三人で、街へ出る。彼、飯盒は、白米一杯

ついである。先いびで、捲え、教へた無し、吉田屋で向

途中、井藤に合ひ、同通して入る。きつ、玉ネギ

いそめるもの、肉のついで、もうで(三四で)白米をモリ

腹につめる。うまい。西五丁目の通り、例、道と夕風

に吹かしてフラ、帰る。足に気分よし。二、三、気分、一、

の、心、難いものとなるおらう。夜は、石神井、快味!

玉木の家で、小コンパ、シテルケ、馬鈴薯、

修十、叶、羊まで、共、村、え、ノ、ト、整理、早、レ、

明日は、鮭を持って、沈没と、早神宮へ、行、三、

11月2日 金 今朝の沈没：化学ノートの整理を少やしてあつたグーグー
寝る。午後1時5分礼帽を井藤氏乗取。鮎持持て、早都宮さん同内
学別が随分ある。約一時間内は到着。唯非常には早かった
何時まで、この象座の明りさの郷愁をわらわした。現報後相談は花の咲く
同居は居るに新島さん。(元鬼野部教授)の仲の面白
礼子さんは帽子の破れを避けて戴く多謝。カ。他は日く。"予科の人は誰で
隠れて煙草の吸い物..."と

11月3日 明治節の佳日
早朝 早都宮さんと共に、礼子さんと同道で礼帽を買った。舞臺に出席して
は"寒"いゆえ。41. 太皇太后へ赴き、スーフを次々贈る。
谷氏来る。やがて今昔本両来る。41. 又新沼本下氏来る。大会を
割新りとやり南風と中で更に本下氏持参の小事務をバツ作る。
美味カ。言ふはあつたし。41. ラーメンを猛進する。
41. 人生の恋愛 科学者の在りて 医学者の向ふ道に就いて語る。
今日の有意義な一日であつた。夕は祝賀會食あり

11月4日 日 朝起きたら真白。遂に雪口へ来り 寒々々々...
右の如くして太皇太后へ行き スーフにあつた。
今日は、静かに心と落ちついてロードを南まで。思索する。
今日此頃の内地の食糧事情の逼迫の新聞に出た。あ。日本は
いま千軍の餓死者か? 41. 日本人の前途! 暗く暗く。
あ。二千万人の餓死者か? 果しては"あ"いのか。
叔母の父母。兄弟友人。魂張小。41. 多幸を祈る。

11月5日(月) 本日。一七。明事さん。二三。秋山さん。
いづれ片方の耳に入つて片方へつて授け...
午は、芽崎 斎藤 今分。雪の降る。カツツと過す。
礼帽へ約一不表のさつ年。入荷にこの事で午はさつ年を代用食
余り嬉しい。道内の連中より来てゐる。41. 何いイヤツ
返はスリスリして。

7/月8日 木

今日一申中 1ト日。消耗検査日。芳村さん、西村さん、石塚さん
打後、消耗の一途。余リユウツツなので午飯後 街へ出て、林橋を四ツ買つて
帰リ、石塚さんの最中、最後席でホリへやる。目黒と二人で
美味い。彼。「今後 現役軍人の停員者の叙職に立てる」とい言ふ下ら
下らな... 二トを 献べつてゐる。 ~~...~~ 祝課後、横田さんと、街へ去る
例の行動は、弄司や、吉田や、荒：脰一杯。帰客後、又、室で
南瓜を煮て、完全沈没!

1/月7日 (金) 曇天。今日、リライオン 一制限、安原の英文法、
二制限、山本の独文法、三限、早野さんの人文、四制限、森さんの独訳
午前中でハハハ。午後は、藤の所で、小宮さんの物理沈没す
代区、林田氏。雨天、体操場で、進駐米軍のバスケットを観る。ストーブ
おれ作の快調也。六限は、三ノさんの武道。祝課後、又、横田と出街
弄司やで、飲と食の。例のコースと出つて帰る。

今日、どうも、気が進まない。早く寝る。明日は土曜日。明日は日曜日。
各休みの何時までか? ... 十二月一日から五と書き、双もあるし。
十二月十二日か、と書き、双もあるし。紛れを、迷説!

1/月10日 (土) 下り... 半日。... フォス... 半日。
午名は、寮のアルバイト。体業の収穫。ガシツ消耗す。夜は、俺、目黒、林、四木
の四人で、南瓜コンパ。炊：南瓜、巻、5巻。まろく、肉に平げてほつて。
後、観映、海の叫び声。杉村春子、好演技、感す。

1/月11日 (日) 寒... 嫌な日曜日。八時起床。
終日、シシと雨が降る。いつに、おそろ、晴れるのをう。
太黒氏宅訪問。ストーブもある。夜は、丹前にくると、机に向ふ。
ス4... 通しが、寒... 寝て、嫌な嫌な。帰省の、風呂の、いづれ、分けて
罷る。果して、何れ、真偽やう?... 在没、諸兄、花田先生、金子信繁、近知
沼子に、音信、寄す。又、明日から、授業一週間。外は、イルの、林から
北川が、息を、つぎ、あつて、まぼろしの、吹雪の、思はせてゐる。

1/13日(火) 昨日来の降雪で全く驚き、窓の外は薄氷の一面、銀世界
 下、横浜の降雪程度、やはり冲嚴な冬がやって来るのか。
 寮内に頻りに休暇、試験の尻尾が飛ぶが果してや真冬の奈辺にある地
 アルバト出勤説が起り出せば、余程しつかりせんと駭く。
 一時限の小官さん沈没、余り雪のいで布団の中で讀書してゐる時、此
 は十時、まよと次の原さんも沈没(たまた小官さんの代返)す。
 三、四の七学から授業するに15、明日は全学排球大会で
 休校、果して何とて一日過すか、考へておれ
 俺のつづく學生活の無意味さを味つて来る、考へて無し
 エッセン、休みの事、俺は ~~何~~ 何を考へたらよいか、又か無意味
 に毎日を過してゐるのか、近頃新聞紙上を埋める食糧危機
 の記事は在かに影響に及ぶ「食足りれば節を知る」で食糧不足で
 何うして道義日本の確立が得られようか。
 早く食糧事情が緩和して平和日本の再来を祈つて止む。
 昨夕 原子の叔父から来信あり、堀内さんのパーティー件也、善哉せん
 吾へんが考へる程、訳の判らざる事が増え、
 在入りの諸友から音沙汰なし、何してゐるのか、今年の正月は何處
 で過すも、両親の元で こぼつ ても入つて、慶正月でもか。
 早く帰れて来て、スキーでもやらんか、熟慮千万……
 夜は首藤の家へ行く、同伴不下、先づ彼が不在で、見る人と訃告大……談論風骨す
 快備也、彼は兵學校出身の所謂、河列スル教員を経て来る人内列、
 偏狹なる思想の持主と思ふは、や、我相違と違ふ、仲のつて、僕人列、
 憶首藤の帰れ、大……駭く、館の味も、又横浜は紅蘭が學校に在學し、
 人に初見参る、仲の以て、江也、茶菓の接待に預り、又時四十五分迄
 駭く、帰寮十時四十分、又土曜日(17日)の再来を約して、
 1/14日(水) 全学排球大会の夕休校
 この頃俺は 科学 在り、考へてゐるが、どうも分らぬ、
 17時、屋内体育場の全学排球大会を見に中、予科各々の振はす、友が、

思ひる。…… 噫、下なる人間が何故此方にも多しうござらう。
それ俺も下なる。諸君が人間なのを、男兒と並んで、恥しくないのでござらう。
一体何時にござらう俺達は濁世から~~逃~~抜け切れるのござらう。

○ 今さらその天の空に照らす日つ
笑せむ日ニヤ。吾が恋止まぬ。…… 万葉集 (作者不詳)

○ 切婦(おとら)の同人情言は須臾(はやく)も~~も~~
止むとまきると見むとぞ思ふ。…… 同上。

○ 念はぬに到らば妹が歎しみと
笑む眉引おもほゆるかぞ。…… (巻十-2546) 同上。

○ 斯くはあり恋むまもとのと念はぬは
妹が袂を袖かぬ夜もあは。…… (巻十-2547) 同上。

11月16日(金) 曇村の雨寒風初来り

五時限六時限の小宮城に決意して帰る。やがて日暮と二人で三北を夏に出る
行先遠し琴似の村外へ。水筒を肩に寒風が吹かぬ。ホコリ並木を行く
緑の路を渡る。ヤルで二人で紅血合魚飲し水筒に充し。夕景の郊外
を帰る。快通の初冬の夕。……

今日宇野城が「世の中は、別れぬとておととのと別れぬるの事程悲しい事は
ない。例へば、父母、兄弟、親友との死別等である。この事程悲しい事はない
然し日本は今、吾等に直面してゐる。吾等は、日本の過去に於ける、死の楽しい
事象と別れぬるの事、である。悲しい事はあつた。別れぬるの事、
一切の過去の事があるが、日本は吾等に於ける、悲しい事象へ突込んでゆく
の事、……」と書つたが、これを聞いて俺は、なんぞか、何の中が、つまってしまつて
悲しい民族、日本民族! 数ヶ月前迄は、理想に輝く、楽しい、日本民族であつた
のに、あゝ、この事、この俺達まである事、悲しい学徒!

然し民族の未来と失つてはなへ、学徒の未来と失つてはなへか？？...

学徒の理想と失つてはなへ、俺は誰か、俺は誰か、今学徒よ！

例へば、祖國が悲しくも未来と失つてはなへ、学徒の断つて理想と失つてはなへか？
光と夢、そして未来に架い希望を抱くべし。

それ以外に学徒の志は必ず道全(る)し、民族と共に奮闘するべし！

(各休服の言詳細が発表即ち、12月16日より1月末日迄47日間)の長期休服
を如何に有意義に過ごすか、然しその前に試験の有無を考慮せよ！)

11月17日(日) 快晴、安藤さん、小沢さん、お出かけ後は沈没。

午名の氷河を提げて三ツ石まで行き、夕食後木下と須藤さんと材料、鰻が一匹馳走
になる。美味い、わぁり...気持ちいい。持参の三ツ石と鰻粉で、三ツ石シソ、工作で
載り、お食べ。御家族始め、東地帯の權威者、三ツ石シソを
知る人の情。然し大々美味也との言を載く。下は、下を、下を、下を、
餅を、焼く。悠閑な、参り、林と南瓜を焼く、下は、下を、下を、
人王問題に就いて論ず。俺達は、教育程度の高し、人生問題に近づきつつある。
過去に於ては、期考、54、55、56の、問題、真剣に考へ、考へ、考へ、考へ、
深更、一針、下を、下を、下を、下を、

11月18日(日) 曇天、朝から以り曇り、陰気な天気、一日の計は朝に...

俺の志、俺の志、俺の志、俺の志、俺の志、俺の志、俺の志、俺の志、

讀書勤勉の君子の事也。道德、今の日本に於て恐る不可解の言葉也！

日一日と深刻化する食の問題、希望なき食の問題、冷、暖味の、

現実の日本、これに何をする事か、道義の墜落も、

俺達の先如物に、考へ、考へ、考へ、考へ、理想と現実！

いつまで、慢んではなへ、

11月19日(月) 晴、試験の有無で生徒間の輿論が乱れ、

その中、生員に教授の意見、予科長の帰る遅し、決定的段階に

入り、おん、おん、深刻化する、おん、おん、おん、おん、おん、おん、

おん、おん、おん、おん、おん、おん、おん、おん、おん、おん、

おん、おん、おん、おん、おん、おん、おん、おん、おん、おん、

今日も又終日 充実の日。諸君三時間 形学二時間の猛り
又時間の苦味は終り頃 連日の睡眠不足が、相当な疲労感を生じ、夜は化学の
ノート 猛り過ぎて 定刻 11 時 過ぎ

朝 午は 軽食 だが、夕食は 正餐に なるように 奮起

11月21日(月) - 11月22日(火) 早しき、冬休み、梅遠、冬休み、早く来、のり
喧！ 梅遠、事よ！ 今度の 休みの日 又 兵庫官立へ行つて 幸哉

11月22日(休) 今日 - 午方の石塚さん 況況に 林田、目黒と三人 車中へ行く
例の狐の巣に 行く。朝 眠、敗業主 渡。又 芥川氏の 彼の 好筆技、一度
に 留飲 した。敗業主は 見事な 場面が 多く 出た。
夜は 四号 室で エッセン作り 快調也。シヤカヒ、シヤク、昆布等 色の 作且 食ふ
明日から三日間 休暇 仍有り 然し 試験は 無し 奔走 ありし。十二月 10日
入つて ホッホッホ 帰省 する 生後 して 来る ぞ。俺は 最終で 岸に 立籠り、残りの
岸生活を 味心に 算る。道内の 者は 泉の 近が 徳産 内地 岸に 3日 早
月里が「帰省の 日の 近に なる ぞ 寝ん たらう」と 言ふが「羨！ 不又 5！」と
言ふもの…… 娘は「帰省の 日よ。」

昨日 藤沢の 戸環から 今日 片山より 来信あり 二の 藤沢より 預け 来る

11月22日 懐かしい 友の 便りも 届く 来る 友よ

11月23日(金) 新嘗祭 今日 三日 連続の 休日 である 昔 帰省 又は 投票 所へ 行く
俺は 岸に 立籠り して 曼珠の 歌 唄ふ也。午後 林田と 以て 植物園に 遊ばす。
冬 枝の 最 鬱々 たる 原始 林中に 都て 彌生、と 高唱 して 歩む 快適也
温室の 菊は 又 芥川に 似て 俺の 目と 果して 異ならず。
西十時 まで 林田に 別れ、松村さん 上下 階に 訪ね 来る 在、そこで 隣に 居て 藤
久と 談話。借 増屋の 取 願中、それと 噴り 出す 歌 唄、帰る。
夜は 四号 室で エッセン 作り、二の 藤沢 連日 就床 零時 過ぎ、然し 起床 八時 過ぎ
車 乗上 八時 過ぎ 睡眠 に入る 也。明日は 臨時 休業

11月24日(土) 昨日の 引續き 好筆 天光、午前中、四号 室で
南 岸 階上 管絃 楽団、初 演奏、ヤマト 節、草津 節、小原 節、等 仲は 威勢 あり
午後「神楽」や 香 籠、観 望、面白く なる。

彼女へ。(過ぎし中学時代の思い出をテーマに)

エルクの原始林に朧々と月が湧き溢る。しんしんいて大石狩の野原が
迫って来る。去り逝く秋、迫り来る冬、僕は独り窓辺に寄って淋しい郷愁に
浸って居る。窓辺！月！そして二階！僕は貴方の事を思い出した。
美しいお嬢、優しいお嬢、君の事を！ 共に学ぶ、苦しむ君の事を！
嗚！中学受験時代、僕は高校四年突破の希望を燃え立て、君は女子大
入学の張切を君の心を秘めて、毎日日々学業を励み、その頃を
中学三年を君と僕、その間は真剣な学業の探求以外に何一つやましい事
もなかった二人だった。互に教へ、励ま合ふ二人だった。僕は英語を、君は口文法
を教へ合ふ所。左に君は口文法に、僕は及ぶに足らぬ程熱心な君の
深更二時三時、僕向きで下を見せ、君は君のしりぞきに勤めさせて
何事！女学生生活に買って居るもの、買はん僕の、女生活に買ったもの！
と眼を眼を二り上げて机にしがみついたりする。●はさくすると下の君の電光
スタンドがパッと消え、「勝つぞ！」君の多々やっ。僕は少年らしい優越感に
胸を膨らませる。時を日、季節、夜も僕に、君に、脱いで
床に入る時は、一心不乱にペンを動かす。解き、引く、美しい君の笑、健やかなら！
と新つ上から見て居る。君よ、ほんくらに何一つやましい事、学問
に在る。熱情を接合は二人だった。そして日曜日にも君と話す時の
案は、心から、同答、答へ合は中学生時代、二人だった。
毎朝、お停留場から君と西へ、僕は東へ、別々を車、忘れ去る。思い出
打連して文庫に行つた時の車を忘れ去る。君は日本畫が好きだった。
少年らしい美しい能く熱情に、学問に、接合は二人だった。
嗚！君はさして居る。憧れの白粉生活に入つて、夜不汁に居る。僕は
君の事を思い出、憧れの寮生活！そして夜不汁の窓辺に寄って、君の事を
思い出、左に君が女子大へ入るのを思い、そして好きを日文学で学ん
で居る。僕は君が能く、学業に生かす女学生、生かす人事を新つて
居る。あの中学女学生時代の事を忘れずに……
君は僕が故郷を離れて、この北海の天地、来たの事を知らぬ。おれは……

然し、僕は君とあるにもあるが、受験時代と過るお蔭で、ソレで恙なく
懐かしく止まるが、白狼生活に入り、感激と思索の毎日を送っている。お永久に君と会え
ないかも知れない。死に中。学生時代の思い出を夢見て……

然し君よ、いつまでも大それたお具。冬は雪はよく風邪を引いて君が……
僕もこれ大人に真。仁者にて生きろ。ソレにていつか過去を振り返る時
懐かしく中学時代の思い出を、美しさを君に思ふ。君の幸福を祈ろう
どうか君の頃の学内での熱情を捨てないで、具へ給へ

— 北海道大平科巨鶴 豊田素子 —

11月25日 (日)。二頭の僕、楽しみを例挙げて見よう

オーに 朝起きて南条路上の便所で小便をしよう。空越は、明々くクワント
の情景を眺める。行く道のそばのコンクリートの島が、羽を折り、飛んで行く
音。コンクリートの上を滑る朝の光が、東の空を、夕に、夕に、一日の日課に
飛んで行く。何となく、朝の光が、朝の光が……

オーに 眠る時、木枯風が、エルの原始林を、道連れに……

都で彌生。そのおまじ、あてどなく、林の中を、竹の、可憐な鳥の……

懐かしく、辺りを見、絶体、内地には、味へぬ。白狼生活は、一時の……

オーに、コンパを、飲食に、飲め、南條、馬鈴薯を、コンパを……

言える。おまじ、考へて、車を、当り構はず、駈ける。あけの果、激早に……

“馬鹿やろ、” 止めた、道連れ、おまじ、言合ふ。おまじ、南條に……

言える。おまじ、考へて、車を、当り構はず、駈ける。あけの果、激早に……

おまじ、言合ふ。おまじ、南條に……

おまじ、言合ふ。おまじ、南條に……

おまじ、言合ふ。おまじ、南條に……

おまじ、言合ふ。おまじ、南條に……

おまじ、言合ふ。おまじ、南條に……

おまじ、言合ふ。おまじ、南條に……

おまじ、言合ふ。おまじ、南條に……

おまじ、言合ふ。おまじ、南條に……

思はれな30... 救済と補給と時代の浸り得る感傷的のーと30

11月26日 (月) 残りの2学期を余すはる三箇内を、4で待望の冬休を、大にアランと進行せし。東京新聞新聞と東京諸学校の深刻の食糧対策に就いて述べたが、要するに食はるべきの学内も、道義は何も、首相官邸の倉庫に泥構が来て、ウチナー洋煙草、その他貴重食品を盗んで行くて、その記事を見れば全く愕然する。4で、置出し強行取締りするが、それ政府要路者の整ふべきか...

夜、猛烈に寒い湯に入ろうと体がたがひ震るほど寒。35分床に入ったものの、馬中と間違ふ。8時頃起床。独居2ヶ月、1時西床。

11月27日 (火) 一限小宮さん、月里と一番後、陣取り、スクラムを抱いて横はり、全く一小时内に眼も通じ、小宮さん、最後屋の席からグーグーいびき声の向い、煙がスワスワ昇るのを驚かす。二限、原、車屋なる哉、遂にあり5分、冷汗三斗! 壁頭「並木君!」次、古賀、堤、遂に終了。三四限の牙村さん休講、幹事の八木沢さんの交渉、成って三限八木沢さん例の孔子の論語。あ、今日は大に脱能して、本履度食糧事情の現状に就いて一帯、4で終了。今日のはでフライ! 快評!

夜は、寮生総会、幹事會更迭の件、倉生大会復活の件に就いて、自治精神の再振興の事へ、完全なる自治案の確立が、目的と急務であるが、今回の二の審判、割合に有義義であると思ふ。

11月29日 (木) 昨7日の降雪を、忽ち銀世界を、雪の上を登校する(とあって一、二、決頂)と北海道へ来たことを感懐する。北軍城のいりのみ、雪大車の一、ある雪の登校、ま、北口へ来たことを感懐する。千石の豊平館、パンを食ひ、木下の二人で駅へ行く、切符入手の件で、本州行切符は全然駄目! 連絡船、船航! ま、無念! 依って、気晴らしに、東京へ三味線武士、観へ行く、炭電寺中並、又、アランの巧撃技、快適な。飛ぶ。休暇近くなると、切符入手困難! ま、種々、我は一片の東京行切符と与へるへ!

その安らぎに京路=着かせ給へ 我の唯一の願也
あつ草のまらき種よ

11月30日(金) 遂に切符入午且つ、本日八叶札幌駅旅行相談所に行く
機嫌に頼み、申告制の連絡船航路・為次付停止の事、受付再開は来月六日
頃のこと、悉くは僕と林田氏、必死の努力、遂に結果、来月十日頃買込
ことなる。彼の助役様に感謝し、手謝り。
来月日月曜日の予科生徒大会の準備会に種々協議事項了決、唯
三組のクラス役員を定む。

役員生徒の転入の件、校内喫煙許可の件、長髪許可の件、
各学級の種々の件、校舎下駄履自由の件、出欠率取捨止の件、
世大予科球技(札幌高等学校化)の件、予科終了後の轉科、轉学自由の件、
内地行切符と学費で賄ふの件、学校所有農園の開放、即ち、収穫物の
行き明示、予科収穫物として、寮玉下宿生の代用食の提供、即ち、
校舎内の整備の件、雪の自給干出、夫の、役員を可決、来べき
生徒大会の提案に同志に叫び、以て達成する自由の学生生活に
なる。学生生活に学校を、学園の更なる自治化を、緊急課題とする
也。予科生徒の自主性と相俟て、新日本の先端を切る也。
予科の学内籠球大会、区統一争組、期待は通す可、猛攻で頑張り
居島組を破り、第一回優勝。

十日は帰省準備の忙しき一日、参考のため、何か予科へに
早く家へ帰っておくことの難い具に、予科中々、予科、
夕刻、青林と二人で島君へ行く、牛の糞物、焼鳥、計二回四時半
余、腹一杯、仲の美味い、又行、予科。

12月2日(日) 朝の13時に雪が降り、予科札幌の街も冬らしくなり、
昨夕の星の晩、予科の降雪、深更の雪の街に降雪、秋の時の悲傷は
忘れず、親家の連連と小包、預け、来信、快意、
小包の連連と、故郷の香りを、懐かし、
連連の予科、旅行外食、予科へ、帰省、和意。

厚岸旅行記

兼平は野球部の結成大会の時と書いて、その札幌駅に到着したのは十時過ぎ
根室行の列車の混雑は至る所人山人海 若見沢、瀧川、富田等の曹の中、一週三
日が連続して帯広「腰かへもろー」と一決して、料金は相当に目高入す
流石、世界三大漁場の沿岸を走つた汽車を初めて乗つての感、又焼きたての
と並べた。

12月16日 午前10時奔函館行で出札 思ひ出るかりに幕を捲
かしばし別れて 帰心一路支の如し 同日二十時函館着

12月17日 鮮人華人輸送の爲 連絡船は物凄混雑
直江荒川両河の激甚なる交渉の結果 遂に17日午二十時出帆
連絡船に東船出航

12月18日 八時函館着 林田氏に別る

午後十時四七分奔 福島廻り上野行車中の人に別る 同行
伊藤(青山学院出身) 岸(明治学院) 星沢(東高研附属中) 林(在瑞中)
の諸君 列車遙遠に遠く上野着翌

12月19日 夕七時一十分 近に諸君に長途の旅に慰し

暫し別る 再会を確約し 後 新宿より小田急で帰宅す

夢に於ては 懐しの恋郷! 両親の膝元へ帰る

12月25日 Xマス 帰宅に之を休養に専ら 泉の出たて 夕暮り

に之を 行きて 豊甲石田は小田急線 文山の麓 眺望よき超好の場処

始めは保甲守 歌待たる 草の崎時代 海水浴に遊ぶ 頃には変り有り

成人は 洋子氏に別る 頃には 女子学校二年の少女に別る 頃には

今日会つて 「本で女子学校と卒業したのよ」 と云ふ 姿を見れば 洋子に

洋子に云ふ時代は 既に四年は経てゐるよ 早いよ

昔の如く 花が咲き 洋子氏 心遣いの夕飯を馳走する 後 愉快な夕飯

を共に 午後九時 再会を約して帰る

人生流轉! 夢の如し 一線に女子校

俺に取つて 此の事を 教へ呉れるのは 彼女を

あの時 あの場処で 俺は 中学生 彼女は 女学生 再会して

過去に 去つて あり時の頃 ありては 彼女の

今はいかに 彼女に 会つて 俺は 夢の如く 考へるが 怖ろしい

彼女は 何と云はる... 俺は 云はる... 云々

「隋念変つては 勿れ!」 とし

12月26日 水 晴後曇 アロバイト

昭和21年度学窓雑感

Sh. Hokkaido Imperial University
Medicine. Lycen 3 class J. Hosono.

一体俺の心境は如何なるだろう
今度の帰省位 怪しい 休暇はない
誤解を 〇〇〇 / 怖ろしい 誤解を
然し 俺は 別れを 別れ物には 運命を
彼女は云ふ 二重人格を
彼奴は云ふ 恋愛を 持てあそぶ 勿れ
彼女は云ふ 貴方は 不誠実なり
彼奴は云ふ 女を 侮辱する 行爲は 止めよ

噫、人よ 歎く 勿れ 吾公明正大
唯 勉学あるのみ 唯 学 ありのみ

"人向の心の底には 不滅の光あり 美しき ありと ありは
真理である。しかし 同時に 人向の心の底には 滅する
ことの 出来る 暗あり 両方 あり 真理である
私達は 二つの 善人 ありと 賢く 出来る 同時に
二つの 悪人 ありと 賢く 出来る である
善い人 といふ 世上の 善人 であり 世下の 悪人 である
善人 ばかり 見ると 出来る人は 幸福 であり
悪人 ばかり 見ると 出来る人は 禍 である"

2月3日 節分 早朝(時35分)車で横浜へ行く
ボックス3箱入車 当分 忙しい。福山 夕方 出京との7。
依つて 午後4時半 上野まで見送る 仔のグループ
彼の心境と思ふにつけても 気遣ひはあまる
幸あれ! 君よ 兄の前途に幸あれ!

2月4日(月) 午前中 自轉車を馳せてミルに買へ行く
獨り道の道とガタガタと行く。

福山様 今日口誓つて 牛乳のナマヤン。

それから 武藤さんで わかり 腰を据えてほひ。おつま 年
南京豆。おまつに 午飯を馳走にする。恐縮なの。

午後2時頃 呼ばる。それから 井上善之代 来訪する
又、小田原 又、及の 洋子 来訪する。種々 雑談の後

帰宅する 又、午後5時近く 平本 保代 来宅する
ひと 客人 万来の 日よ 夜は 母さんと 武藤さんへ お風呂

と 貰へに行く。熊沢天豊。笑ひ話に 先か 笑く。

厚着の 井藤の 来信あり。目黒から 来信あり

彼ら 相愛する 年がつかぬし... 悲哀の

何処も 同じ秋の夕暮れ

「私、ほんとうに何もかもお話し出来るだけの 信頼 尊敬
出来る お兄様が 欲しいの。事々の 感情を もておそれやしない
不識臭の人 嫌ひ。貴方は 私の云ふ事をお分りになる」
分るもんか。分るもんか。そこの 分る...のよ

学生時代の 男女の 交際! 一体 各自 どのような 感情で 交際
してゐるのか。" 男女間の 友情は 美しいものがある"。

友情! 男女の! 分らぬ。どうして 分らぬ

彼女の云ふ言葉 又 彼女は 云ふ。

「さ! 分る... 正しく 俺は 自暴自棄の

俺に 運命の 青春 いる...のよ。

2月6日 (水) 天候 曇

實際 若い時代 古いものはどうして二人白に変えておるものか
それと違ってその事にはあつて中けるのさ。

新しい時代 懐かしい時代 あつて若い時代……

今日 彼の女は言つて、「~~貴方~~ 貴方は奥につめこい 感じのする方
ね。この間も電車の中でお会いした時。何をかお側に居るのが
悪いような気がして居るわつたわ。そして妻のお話しを馬鹿にして
聞いていらつたやうなやうな気がして……」

それは 貴方はいつも 何をか考へて居るやうな物。

遠い、遠い、妻などの及ぶところなやうな事さね。

だから 貴方が 妻に 冷い 人のやうに思はれるのかしら。

でも…… 二つで二人で お話してみると、そんな気 全然ないわ」

冷い 感じのする人、いつも何を考へて居るやうな人。

俺は 今日 彼の女ばかりでなく、いつもそんな事と 別の人が言つて
やうな気がする。それを だれか M子に、H子にそんな事を言つて
何も俺はそんな事を気にする訳でないわ。どうも 異性 同いやうな
事と言はれると一寸 気になる。つめこい 感じのする人。

若いとさうかも知れぬ、一体、全体 女といふものは俺には分らぬ。

然し 俺は 彼奴の 気持がよく分る。一層……？

然し Kが言つたやうに 男が 眞實 になると 愛する事 出来るやうな 女は

矢張り 居るぞ といふ事 身に沁みる。

一度、眞實 になると ぶちまけてみるの。然し……

彼奴は 確かに 俺に対して …… があるらしい。俺は 断言する

俺のつたない 過去の 経験 から 断言出来る。

だが 俺は 過去の 沢山の事から一寸 考へて見やう。尤もそんな事は

眞實に 彼奴に対して 愛があるから…… 然し……

彼奴 下手するよ。彼の Mに 対する 人格の 侮辱 があるから……

何を考へて居るのか！ 馬鹿野郎 貴様は 男がぞ……

学者肌のタイプよ、いっも一沫の淋しい含んちロマンチックな人に見えるは、それが近づき難い、冷厳な人に見えるのね。何時も何かしら感傷を追っているやうな……
妾もさういふ人はなりたつや、さう妾さういふ人好きな人であるもの……」

2月10日 (日) 曇

昨日末宿泊の中田氏。それに昌兄、余三人兼て企画中の返子訪問を企つ。原町田奔 10時52分也。
横浜にて降り、駅前なる食堂にて午餐を共にす。
日く定食一円、お雑煮一円五十銭也と。グラスクなる味を押し込み、余昌兄出づ。残るは中田氏のみ。彼、最名の一滴まで飲まんとはるなり。やがて市電にて来るは横浜一の野天市なる野毛場なり。日く、ブラックマーケット、日く大衆市場、日く露店市、日くニコニコ市場、噂に違はぬ大盛況なり。何れも買物にて無し。就中見世物に無料見学し居るは快適なり。ハマに誤別を告げて出づ。やがて来る相州口返子みかん、~~製~~具はら玉工産。久木なる叔父宅を訪小。久方ぶりに叔父と卓を囲んで杯を重ね、又良からん。心づくしの馳走に吾がツミを打ち、暫し余興大会なるものなり。大いに興す。

2月11日 紀元節 (明) 曇天 明くれば曇なり

前上は賑ひ、紀元2600の疑惑! 600のブロッ
何れともある、臭し、休日なり。
治子、健治を同伴して葉山なる中田氏宅を訪ふ。
快調なるエッセンスにありつく。
信歸迎にて夕飯を叔父宅で馳走たり。夕時42分奔て出ず。順調に帰る。時は午の9時二十分也。

2m.13th ■快晴 朝からホカホカと暖一日

午前中は薪割、午名日定例の小田原さん行き
正面に大山の雄姿、山又山の丹沢山塊の背後に男らしい
雄姿、何かは胸にヒキめきを感じる。

そして暖、午名、やがて来るべき春の前の何とも云へぬ
思ひだ、春のヒキめき、来るべき春の暗示！

青春だ！若いものの特権！春のヒキめき！

それにしても良い天気だ。どうしてこんなに素晴らしいのぞらう。
今日は初午だ。それに好天気。小田原さんで赤飯を馳走
になる。総選挙も近づいて、お団子なる被選挙権者

の立候補資格確認書の申請も了って、嵐の前の静
けさを偲はせる。夜は母さん、昌さん、武藤さん、お風呂
もして、四朗と入って放送劇「夜光る顔」を演じ、お豆を
ポツリポツリやる。暖、冬の夜だ。

2月14日(木) 快晴

昨日、小田原さんからの帰途、愛甲石田の駅で面白い紳士
に話しかけられた。「これからはいよいよ若い人の時代です
君のやる前途有為な青年にレカリやって貰はねばなりません
世界中の何処の口からも信頼され、尊敬されるやうな日本を
建設して貰はねばなりません。」

想は重大使命だ。過去に於ける過る愛口心の解放
を以て、眞實の世界に自由の若き思想を思ひ切る伸ばす
のだ。若き吾ら！学徒吾ら！

身、大山の偉大な雄姿、漸く暮れんとする晩冬の空
に紫雲を巻いて聳立する雄姿！
世の俗悪を超越して、只、薄暮の空に限りなき落着
を見せて、男性的な大山の姿、

俺の心には何か知らぬが、居る、もうぬやうな熱い、

込み上げて来た。噫 男児一匹何 想ふらん！
それに俺は苦いのぞ！ 溢れる若さがあるのぞ！
自由の大地に 思ふ存分 胸を張って 手足と 伸ばす 事が出来るのぞ！
大山の雄姿を 目の前に 彼の紳士の言葉 俺は何と云へぬ
張り切った 気持に なるぞ。 小り 仰ぐ 俺の胸に 大山の雄姿が
小事に なるぞ 大志を抱けと 激励 して呉れる。
噫！ 感激の 朝暮

2月15日 快晴 連日 温暖の日が 續く。 尤も 春のやうだ。
先般の マ 指令に 基く 政府の 公職 追放 範囲は 政界
に 大波乱 を 来して いる。 進歩 自由 両党は 何と云っても 痛手だ。
それにしても 醜い 罪の 容れ 合ふ が 行はれて いるのは 以外だ。
新入の 立候補 が 多いが それだけ 中味の 空の 人が 多いのぞ ない
だらう。 進歩党 ありの 立候補 禁止者 が 代りに 出馬 させる
傾向 があるから。 高校 三年制 の 復活 が 実現 した。
それに 中学 五年制 も 復活 した。 文部 さんが 文部 大臣 になったので
違か 斯う なる と思つて いる 先生 だ。

これに 俺達も 三年間 自由な 高校生活 を 送れる 誤ら
中学生も 実力 が つかし。 眞の 学問 に 没入 出来る といふ ものだ。

2月16日 (土) 雨。 雨又雨の 嫌な 日は。 實際 雨程
人の 氣を 面白く する ものは ない。 何も する のは 嫌だ。
こんど 日は ラジオ でも 聴いて 早く 寝ると しようか。 それにしても
今夜の サラダ は 美味 しかった。 -----
臭い 夢 ども み ぬら 寝る も 又 良からう
明日は 天気 なる やら...

2月17日 (日) 晴後曇 絶好の アレイト 日 晴
今日 武蔵 さんへ 防空壕 の 掘返し して 材木 掘り
書は 久しぶり でお 刺身 を 馳走 する
木下 より 来信 あり。 彼 悲觀 めな 事 を 言つて 来る。 即ち 二月で 休みも

2月18日(月) 晴

窓越しに月押し照りあしびきの

嵐吹く夜は君をしのぎ想ふ …… 万葉集

光々と月は汗を流してある。月々々々々々

深更の月は今中空を横切っている。俺の心は 何だか

知らぬが感傷的になって来た。月、美しき月。

又君の事を思ひ出した。俺は月を見るとき思ひ出す。

君よ 何処に於てこの月を見てゐるか 優しかった君!

麗しき君! 俺は君以外の女性を今も且て見出し

た事は無い。俺は いつになっても君を忘れない

君も忘れないだろうね。"私、いつも私みている者はと云ふへり

下った気持を忘れないわ。それが人間として一番大切な事だと

思ひますの。俺は忘れない。あの頃の事が走馬燈のやうに

浮んで来る。あゝ 俺の気持は一杯だ。

俺は精神的に君をたった一人の人と思つてゐる

若い 中学時代とある程度は慰め 励まして来たを君さ

「私、ほんとうに不幸だわ。何もかも私不幸だわ。私、はもう

お婆さんのやうね。然し貴方は幸福ね。私、女学校三年

の頃は軍人に憧れてゐたの。然し今は違ふわ

自分の命を顧みないで。それはホリが 妻の事も 子供の事も

顧みない 職業なんて嫌だわ。私、今好きな職業

お医者さんが好きよ。文学的に尚、趣味を持つて医師

いいわ。……。」 —S 公園にて Y子は言った。

何ラてこんな事を言ふのだらう 分らない? …

「オー。俺が 過去に於て交際した 幾人もの女学生が言は

なかつた事を 俺の前で言つた。 Y子よ。いつまでも若くあつ

早く大人になる勿れ!

2月19日(火)曇時々晴

この頃の慌い世相にともずれば、自分の権限を主張して
自分の義務を怠る人間が多い。この辺が民主主義の
名を追って実を知らぬも甚しいと云ふものだ。
特に過去に於て“誤れる愛国心”に馳りたてられた人々
の中に多いのは当然の事とは云へ。残念だ。
若し純情を命に口を為し捧げんものと、軍に志願、入隊
入校に人々に多いのを、それは無理もある。
突へられた思想の外には、何ら外部との交渉を絶え
た外部の学問、その他有識者を卑下し、彼らではなかつ
た。そしてそれを以て誇りし。自己の何ものもろが知らず
只一途に自己に満足し、奢る。彼らではなかつたか
勿論俺は彼らを憎みはしない。むしろ、軍内共が唱へ
祖國興亡の秋、一身一家を顧みず、特攻路にはせま
彼らの何も知らぬ純な気持に敬意を表する。
その頃の俺の気持は今正直に告白するが、斯くして
陸士、海兵、予科練に入っていく友人達を羨むには迷
れなかつた。中学卒業も迫る時、俺は迷つた。
何しろ軍内華かるり頃、軍人でなければ人間に非ず
当時の世相もそれを当然としておる。我々学生間でも
優秀なものは、寧ろ軍内係諸校目ざしを
何と云へても陸士、海兵に入らざるは、学生に非ず。
世間も又彼らに時代の英雄化した。
優秀な生徒にして、軍諸校を選ばず、高校、その他に走るも
のは激減した。世間又それらの者を非難するも
幸ひ余は感ずるありて志を曲げず。之を分は母校
の自由主義的ミッション教育の爲とは云へ、余の心中大いに
悟る処あつたのであつた。そしてクラーク師の傳統に生くる

工場の学園に合せ集つた。そして俺はつくづく個人の
修養の重要を痛感した。個人の人格の偉大さを自覚した。
過去においてかりそめにも誤れる愛の心に共鳴し身を悔し
大自然の北の隅に於て俺は自覚したのである。
身を持って特攻路へ行つて友人達を気の毒に思つた。
そして一日も早く覚醒して呉れる事を祈つた。

その事は多分にその当時の俺の日記に見出される。
個人の自由を束縛する教育、人格を世視せる修練
日先の事はかりに捕らへその日暮しのくよくよした。理想も何も
ない。学徒は工場の一隅に怪談?に耽つてゐた。
友人の一足先に上級校に入つた俺は、その当時のあのまづ
心境をよく在校する友人に書き綴つたものを。

「あ、俺は始めて理想をいふものを自由に画つた。

それは日先の事はかりに追はれず勤労生活中に於ては夢想を
しなかつた事である。と、この俺の親書?は友人達の間に
問題を生じらう。或友人は怒つて次の如き文を返して呉れた。

「兄よ! 兄の感情は余りに時代をかけ離れてはいるいか
今の学徒は祖國と共にあり、そして理想を画ける位
祖國の学徒に対する要求は大きい。学徒は常に祖國と共に
運命と共にする他はない。」と、余をして時代錯誤者
たらしめられた。余又反して曰く「返信多謝。兄が賢見良察
す。衆人にも兄よ、学徒は現実には迷ふ刀も! 先人の残せし
夢の跡を追ひ、新しき新天地を开拓するに地道なし
果して現在の学徒は祖國の運命と共にあるや」
と、この一文は友人間には大反響を巻き起こせるなり
曰く「兄が云ふ新天地の开拓とは何ぞや!」
曰く「兄は何を以て祖國に報ゆるや!」
余、反して曰く「余は大東亞戦の成否にかゝらうす」

次時代の夢を實現せん爲に 勵むを以て可し。
余も亦祖口の心勝を信ず 醜態揚陸せば 擧げて擯退
するの他になし。然れども余は俗世を超越して 自己の
本来に目覺むるのが 学徒の道と信ず。
此処に於て 終戦となり 心中秘かに 快哉を叫びたる也。
あ。余の心中 本来無一物
世の多くの学徒よ 都塵と共に 奉仕して 学徒諸兄よ
諸姉 諸弟 妹よ 自己本来無一物なるを 銘記せらるよ
常に卑俗を脱せよ。苟めにも 過去の苦學に 流さる
べからず 学徒の眞價は 失はるべからず
余輩も 諸兄 姉 弟 妹 には 一沫の苦言を呈するの
自信を見出しを是は たり

2月20日

- 眞に失恋するものは他の女性によつて救はれない。反つて宗教心
や人類愛によつて救はれる。他の女性によつて癒される失恋は
失恋でなく、性慾的欲望である。
- 恋するものは相手を尊敬し 自己を尊敬する。益々自己を理想的
な人物に築き上げようと思ふ。だから 賤い眞似は出来ない。
恥を知つてゐる。だから 恋するものは自己をいつはるれない。
二人がお互に愛し合つてゐるにしかるまで 内気である場合が多い。
- 十八・九にてもなつた交際社会に出る習慣は日本にあつても
いいと思ふ。さもないは 世理な恋愛をして 一生不幸の原因
をつくる恐れがある。
- 殊に女の人は 男の性慾と恋愛とを混同しやすい。
性慾は男を卑劣なものにし、あべつかつかひにし、口壺を平気でつかせる
だからお世辞のうまい、巧言令色な男は 恋愛で女に近づくとなく
性慾で女に近づいたのである。

— 武者小路實篤“續人生讀本”より —

雑内の長沼より来信あり。俺は、彼が表面非常に粗野豪放であるが、内心深く教養を藏しておるのが好きであるが、今又、その切なるを知って、益々尊敬の度を深くした。「君の場合、失恋などとは自ら性質で果にするが、ダンテに似て、失恋の結果、彼の大作をものしたとか、~~恋~~恋の結果、如何によらず、其の人を愛かするものな...とか、よき体験ならすや、...」とあり。俺の心境については、色口臭い諸兄が、去って来てるが、昨日の福山が「君に何かある信念が確立してないから」とある本は、おぼろげに、リーベも、フアンセも、リコエてあげ、次迷へる小羊よ」と強く言ってきたので、俺によき示唆指し示して呉れる想は、友人程、卒直に意見を呉れるものはない。そして友人程、思ふ事、為す事を、打明ける相手はない。有難きは友人、大切にすべきは友人。そして、その友の為には、軽蔑しい行動は避くべきを、そして、友の為には、そと恥しい人前に成るのを、俺は常に、Hさんが言つて「私のやうなものと言ふ、へりくちを気持を忘るまい。一歩、教養を以て、良がある。そして、深みのある生活と、~~力~~豊かなる医学者こそ俺の理想である。(葉山の、中田、花又、来宅、希泊、侃談、45)

2月21日 (木) 曇時々晴

モトリアムに明けける今日此頃の世相、小銭拂拭の市場息づまを世俗も、益々呼吸困難を感ぜざる。果して政府のこの緊急最後措置は如何なるか。賛否両論渦巻く中に、日本は、何処へ行くの感は切実なり。

2月22日 (金) 晴

俺は、うとくとく、青春の悲喜といふものを感ぜぬ。否、悟った、何を昨日の決事からしては、前より感ぜる事ではあるが、其山園の麓に、寐をりて、思索して、俺の胸中には、ほつきりしものが、摺りあはる。

内田、山田、島田より来信あり。又旭川の榎谷よりもあり懐し。
山田からは、石井の姉さんにも内田も大変心配している。
一寸おておまて。又々悩んでおるのか。喝！妄想邪念を飛はして
子供の心になり給へ。早く会ってお氣を述べた。須らく速く！
とあり。俺は及信に曰く 馬鹿野郎！俺は人生の是非と云う
ものを悟つたのだ。汝、心痛まじめよ。と
又内田からも、会つた。かゝる是非来汝せらふよとあり。
内田にはほんとは申訳な。ほんとは、いい奴を。
俺の親友として恥けない奴を。物中お供しよう。
島田からは 親愛なる友の御胸に！と冒頭して。
その青春時代には、なやまをけふやん下し、即らんなさい。すれば
貴兄が以前にあつて見て、楽しかつた事。交合つた方は、自分ほどの
様で、心で彼女に望んでおるか。又現在の、御交合の、どのほど
彼女の心を清く、美しくしるか。…… 唯、御交合をするならば
女に美しい清い心を植え付けると共に、立派な女性にし、他所から
見ても、絶対的に讃えられる様を…… 考へて、私には、真に、おつ
かしい。出来る。いいえ、もつとも、私の人格が、いかに、築き上げ
る迄は…… とあり。如何にも島田らしい。書ぶりを。
然し、俺の今の心は、公明正大。悟つてから……
何事も超越はつた。思ひ切り、やるぞ。
深みがある。巨匠者こそ俺の希望を。
武蔵の人には、アメリカ兵が、やて来て仕様が、なつて、泊りに行く
今日晝内、薪取りに行つて、いるら。来玉、来玉。奴さん、隣の
浦島や、と向違つて来るのだ。やつ、の、事、で、放り出す。
叔母さん、始め、頼子さん、さとしさん、始めてよく眠れると
よろんで、おられる。俺も、米兵の用心棒、には、心も、な、仕事に
使はれるもんだ。實際、そんな人と、米兵の横暴が、目に見えて
来る。戦敗口々みぢめさ！仕様が、物え——

2月23日 (土) 晴

午前7時15分起床 朝食

= 9時半 神や繁利さん来る 雑談いじり

= 10時45分 武藤さんと矢張り帰宅

= 12時 午飯

午後1時半(新原町田) 小田原さん行き

5時36分 駿甲石田参 帰途 午後6時半帰宅

午後7時10分前 夕食 午後9時 寢床

「この前はごめんるさい物」 「俺は少からず怒ったぞ」

「ね、ごめんるさい物 許してね」 然し俺は怒るもんか

超越して 見てま 超越して ……

~~2月~~ 3月4日 昨日から幾分風邪気味を

一体俺といふ人間はどうしてこんなものぞ? 一つ一つ 自分で自分が

嫌になつて、これは心が安定してゐないからさ

あ、早く札幌に帰って心ゆくまで勉強したい

ねえと例へて、早く帰りたい。是日 Yが書生選に文中に

「私の都合の人がありやせん、私の心の都合の方が大切だよ」とある

一体 誰の人の気持はどうかんがらう、今さらか

あま、俺はもう書くのが嫌になつた!

3月9日 余り書き度ない 記録のみ止む

待望の支展行き 午前八時十分参りてゆく

冒見 木下女史、小田原洋珠、小生四人、十時半入館

伯調 / 見るべき物にて無し

帰途 函館聖蹟にて キー一人、観映す、科学者の象徴の

言ひ知れる事情と研究(ラヂオの発見に對する)に對する事情の一体化

につき 考へさせらるる他、他は望みなき

帰途 八時 洋珠泊らる、軟寝 11時

3月10日 午前中 馬鈴薯 柿付け作業
午後2時 釜甲石田へ向ふ 小田原家 招待の晩餐会
に臨む 同行昌又 同夜は うんざりする...? ほゞ 騒いで
宿す 余 興中 洋林の 豚の 真似の 傑作なり
余 景色夜叉 和也 演ず 興味つくしんとして 湧かす

3月11日 9時 小田原家と辞し 帰途に
武蔵に立寄り 兼て約束にあり 親子妹と上京す
銀座を道邊の後 全線観て "街の人々者。觀映す
世氣なる 作品なり 何故か の如き 映画を造りしや
少くとも 道徳心 翫樂の 世情は 万引かせたり
後 渋谷に出て 松竹にて 又觀劇映す
松竹少歌劇と 女生徒と 教師。より 映画は 月夜可
なり 現世の 女学生に あそびかけの 人が居るや?
行きすぎに 心の ずぶ 映画は あの 映画の あり 口元の 道徳心の
若主人 見る心の 批判を せんとするは 此又 世氣なる 演出者の
いふ 世氣にも 堪へたる 新人は 此の 女優は 一体
身を 現世にあるか 榮養夫 謂の 如き 女は 映画も 食へるものか
せめて 撮影の時 飯を 食つてや 小 雑次では 既月石
帰宅 9時 武蔵家へ宿す

3月12日 諸兄へ 奉信す
山田、内田、木下、柳公 惠通寄 島田 あり
午後は かつかりに 舟遊 江ノ 感あり
3月14日 町谷 綿屋 祖母 葬式 通夜 参会す
3月15日 綿屋 葬式 本家 代表として 参列す
22日 (金) 佐藤氏 来訪せらる
彼の リーベ 卵巣癌 にかへ 入院手術 経過 思ひし
よりすと 同情に たえす

3月23日(土)雨天 順三才二十回誕生日 依って午後7時より

寸松亭奥八疊間に於て晚餐会舉行せる

由柔賓 武藤友之助氏 故君 規子嬢 仲ノ盛会ホリ

母さん 心盡りの料理に舌ヲカミエラフ

3月24日(日) 久方ぶりの晴天 終日畑作業に快事ヲ

馬鈴薯 植付ナセヨル 夜は武藤氏ヲ困んで一杯ヤル

ほのかふる 酔心地ホリ

噫！ 俺は自分で自分の心がからふ、横決り再三再四
音信あり、山田、内田より出陣せよ、然し俺はいつも反信の
度、余は自己の信思が確立にあらうに、兄字と会ひ
不徳ホる思慮にて兄字と言論し、又兄字の言論に迷はざる
を怖る、と書いてある、移ろい易き若き日、徒に虚生の
夢とホす勿ル、今こそ俺は自己の信念を確立するのだ
ヤが、妾日ごらい心の変わる人間は、ふい、と言ふが、
若し人は、どうにも思想が変轉する、例へば、
現代の若し人にとって最大の缺點は、教育はあれど、教養
がふいからず、故につまらふ、時事評論、週月刊誌は乱讀
するが、崇高ホる古人、聖人、文学者の言ひには、余り目をこらさず
此辺に現代の若し人、思を致して、自己の信念を確立し、算
たしものを、歸れも迫つて、今日、俺は、休暇中の体験を生かして、
勉強に、と思ふ、一度横決り出て、内田、山田、石井、福山に会つて
ゆつり話しな、實際、内田、山田に対しては、申説ホい、
彼らの心中はよく分る、故に申説ホい、又、腹の中を
打ち明けて、討す事と出来る、我グループは有難い、
内田、山田も夫々、自己の信念を生かして、俺と痛論するが、
俺も俺の過去一月余のスランプの、結果を、傾注して、反駁す
るので、何れだ、とも、符違い、率る

間もなくおゆが水しおゆが水は ちるなと思ふと 悲しい気持ち
 一杯にふってしまいます。 お別れ ~~も~~ しても 何時までも 何時までも
 心だけは通じ合ひますね...
 ほんの短い間でしよけれども、何か妹の様ホキモテ...
 いろいろ 教へて 載った様を 気がいらします。
 いっまでも 妹のつれづれで 聲が ちる下... 私もお見さん ~~を~~
 と思つてます...
 美しい並口を 道邊をながり 郷愁にふける 貴方の
 面影を 思ひ 泛べると 何となく 私の心で 悲しみに
 してきます。 故郷の空。と 歌を 聴く 淋しい 貴方の 姿
 が 一番 貴方の 優しいお心に ぶちかま 様を 気がいらします。
 美しい声で いろいろ 歌つて しゃべり いらさう と思ひます。
 叫ぶ事 なら... 一歩一歩に 並海道の 野辺を 歩いて 見渡す...
 — 志を果して 何時の日にかかへん —
 東大の学生とふつて いろいろ やる 事をお 待たして 居ります。
 くれぐれも 御機嫌 よしう。

— (Y のり の 音信) —

懐い故郷の山。 いちいさ さいは
 友よ！ 安んぬ。 永久に。 永久に
 あ。 何となく 懐い。 悲しい。 悲しい。
 四月一日(月) 快晴。 本日より 家は 八町会が 十五隣組
 長の職に就く。 又母さんは 八町会 婦人部長を 拜命す。
 名実共に 町内の 顔役として 満足するのを
 春を。 暖い日光に 身も心も ころんと する。 モーターの水を
 吸み上げる 音も のんびり して いる。 春を。 春を
 俺は 帰る 暇は ない。 身の 為を 学問の 為を！
 辛い。 悲しい。 だが 俺は 帰る。 雪の 並風へ。
 暖い 故郷を 後に して。 帰る のを。

◎ 目下の如く 帰学予定

- 4月1日 叔郷 (小谷村内) 暮参
- 4月2日 瀬谷行 (瀬谷祖文面談) 夜横浜中点
- 3日 朝 帰宅 在宅準備
- 4日 切符 (上野) 長系挨拶
- 5日 在宅準備
- 6日 出郷 午後2時 上野発

實際 俺はまごまご駄目な下りな人間だ
 何故 なんかどうしがホウのどう 自分で自分があきれる
 噫々 早く帰って真理の探求にいそしめたい
 総選挙は近い 保守 進歩 各党入りしつゝ合戦は
 二 旬日の中 決まるのだ 此処 東京二区は 社会党の
 勢力進出甚しく 何と云っても 社会自由 進歩の順では
 不利うか

4月14日 (日) 晴 9日 22時10分 発 上野に出発
 青森、函館では何事もなく 荒れ11日 深夜帰京了
 今 青木 新沼の残学生諸兄と 四つ折りで 対面す
 いよいよ 又 充実に 療生活の 懸念は 生活資金の 内題どう
 やら 羨望してらる
 総選挙も 予想通り 自由党が 一党 不利 案外 婦人の
 進出には 驚き 噫 何と書く 気はし 嫌
 嫌 不気い

4月16日 (火) 晴 十五日より 野球部の練習開始 大消費
 實際 現代の スポーツは 悲劇を 先ず エッセンスを 確保せずして 何が
 練習を 大いに 運動班の 改革を 望む 練の 大量買出しに
 かわるべし 考へさせらる事 エッセンス 燃して 何が 練成
 二ヶ月では 失調を 然し スポーツの 春は 遠慮も せめて 来石

- 俺の心は真空を 何も無い 早く世人と取交いのつめめ事によって
 けふとあせらばあせる程 駄目だ。上野から札幌まで来る車中
 全つと 俺の心境は変わる。俺は今まで 假面を被つてお
 のだ。理想主義の心。然し世は現実、冷たい。みぢぢと生
 んだ。起つて来る。凡そ 往年の 高校生の 暮生活は 不可能
 だ。現実には 立脚しない 理想の心で 到達考へようもない
 理想主義から 現実主義へ 一片のパンを求めて キウキウして
 歩いて 何う "明日に生まん" と "降りきしみに共にせん" だ
 理想主義の 假面を 持てる! 何も俺は 彼を 敵にしない
 良く 理解出来る。むしろ 反して 進む。だが 現実の 冷厳な
 事実の 前に 立てて 云ふべき。そして それより 前進せよと云ふべき
- 総選挙 どうやら 終つた。出鱈目を 民主選挙が
 反動の インチキ、モロウなる 人間が 留ま 吹くは 過ぎない
 解散せよ! やり直せ! 更には 下らん。然し 何をやつても
 同じかも知らん。日本人は 全く 虚無心 ぶりだから
 して 道義心の 欠けを 至 全く 無い 民族に 落さかけておるの
 だから。それにしては 婦人候補者の 大量進出は 口 驚異を
 彼女らの 買ふべき 使命は 重大なりと云へる。
- 馬鹿不! 糞喰へ! 純心不 彼女に 比べて 彼女の
 態は 何ぞ! あつ 俺は 彼女の 心は 不
 純不 清い。乙女心に 俺は 泣ける。
 それにしては 彼女は 何と云ふ 奴を 愛の 誤解を
 今、女性の 最大欠点を 離れよ! 去れ!
 然し、考へて 見れば いかん。一方、彼女を 清純不
 愛を 俺に 寄せて 呉れておる 美しい 濁り不 清い 愛を
 俺は 彼女の 愛情を 忘れては いかん。そして 胸に 秘して
 勉強するのだ。彼女も きっと 俺を 惚んで いる。いな
 気持で 毎日を送つておるに 相違ない。

4月19日(金) イス受難日あり。この日我 北大予科恵水会は
祭会す。意義あり。同志と北一栄教会に小野村牧師を訪ひ
援助を乞ふ。恵水とは恵迎の恵に ~~恵水~~ 牧師来訪の日と
取りて水曜日の水あり。併せて恵水 イス日くろ 生命の水と云へる
の義あり。噫、恵水会は果敢に祭会す。感激あり。
小野村牧師 益々 昔年の懐みと哲学、及び宗教に就いて強調
せらる。味不べき話あり。恵水会は月曜日同士の祈禱会
及び 聖書研究会あり。又水曜日は 牧師説教日とす。
大いなる希望をもちて 祭足る 恵水会あり。幸ある!

4月20日(土) 午前 祭珍々ス 予科防ワク注射の爲 祭にいくばく
午後方おいて 街へ出る。夜、予科に 野球部の座談会あり
坂本先生 先輩話りと語る。おもしろい 観映 "真実一路"。
小杉勇と片山明彦の名演技に 感服す。山本有三の名作も映画化
されて あれほどに 作者も満足であり。
おもしろい 飯食す。然しあの羊本人には 癖に障り
本日 洋子妹の来信あり。彼女 懐みを訴へて来る。切なるものあり
返信す。さし何と云つて来るものあり。

4月21日(日) 復活節

我は 甦りし 生命あり。我を信する者は 死すとも生る人。
午前十時よりの 札幌独立教会 礼拝に 赴く。
同伴 今、伊藤、牟田、岸、三目、後藤、布村、氏。
夕方3時に 礼拝に 参加す。
夜は七時より 全寮コンパ 於 食堂。エツセン 馬鈴薯、豆、
海苔、麵等。ミルクもあり。各寮階上階下一人免の
入り乱れたの大騒ぎ 熱演。寮務部の寸劇。
松橋氏の 舞踊 等 見れば 喜ばしきものあり。
愈、昨日から 学校あり。大いに 張切るべし。
野球部の トレーニングもあり。春とも 祭は いそがしき事也。

4月22日(月)晴 新学期授業開始

26日(金)晴 自分で自分の心を決めよう。二ル程予の思議不事はい
俺も今二やうさふと ぶらぶら車

今日は安眠薬にありける ハムレットを、どらやう出来たかどうやうか
も、地をやる。 ぼてけりかて 冷汗を掻く
午後、生野部のアルバイト。 24日夕員後 観映 "幸運の仲間。
又いっしょでエケンを見る。 明日は 体操、化学(有機)、物理を
松屋を 入札する予定を。 後輩の島一肌わかろう

5月1日(木)曇 天長節の記念晩餐会は快調だった

近頃はいい エッセンの快調さ 赤飯 蕨メの豪華版に舌をみ
えうつものも 近頃のエッセン事情をう 描いても感謝すべき
今日は 午5時 松屋を連立し 外出す 吉田やで 例りのものを食す
菊壽江 壽司を食す 5時 観映 "恋愛交又点。
夜は 7時に 水曜会 "聖書の重要性に就いて、小野村牧師
より話あり。 了て 閲覧室で 座談会を行ふ

不日 家より 来信あり

實際 近頃の俺は どうかいてゐる。 思ふ切つて 一つの事にぶつかつて
中々いい 少くとも 張切つてゐる 過去の 受験時代の 懐しい
工場が いけなかつた。 こんど ぶらぶらいい 俺は いてはつた 工場が
いい 願は 障る。 障る! 又あの頃、俺は 歸りた
身も 心も 勉学一つに 融かして 頑張る 身になる。
不快な 毎日を 生きてゐるとは 名ばかり 不
消耗してゐると云へば せぬで 何と云へば 嫌な 気分を
若し時代の再訪したいのとは 思ふは 進み程 駈ける
高生! ぶらぶら... 順天一喜! 貴様 今でも 高校生を
轟野郎 目覚めよ! 起きよ!
そして 逆張り!

余本日より感ずる所ありて断乎禁煙生活に入る
過去に於ける浮動を信念より脱して眞の苦惱を潔き
よきふるまひで行く爲に、断じてたゞすべからず
男らしく堂々と訓練を志す

1. エッセイに対する認識の是正、医学徒として、わたくし積極的に考へる事
2. 規律ある勉学志向の確立、高校生として三徳主義の建設に邁進する事
3. Be gentleman! 精神の具現、廿大生として吟拏を回す事

○ 幸福なるか否、悲しむ者、その人は慰めらる人、
○ : 心の清き者、その人は神を見ん、

以上を信条としてやり抜く事、男兒立志出郷関!

断乎とて貫くべし、
そして眞の専ら生活を送るべし、個人の完成也
路の完成は今、ふたつある事を銘記せし

5月5日(日)晴 端午の節句ぶり 今日午前中 春にて 齊藤さん)の
英訳。下訳。大体片づける。午飯後何も為す事ないので 午寝と決める
やめて 午多三時と覚ゆ頃。何ぞか 街の方を 騒がし。何事かと見ると
ザレンの音。もくもくの中空に 沖つる 黒煙。火事也! やめて 情報入る
南の 保善病院 附近と 廿十条のニノ所也と。廿十条ノ 大黒の 家
の 附近 ありと 飛起る。一目散に 今の 堂へ行く
今 新習と そばがき 製造中 慌て そとに かけ込んで 寮にある
ローンと 横切 病院と 横切 韋駄天 走りに 馳つた
車に 火口 ニ三軒 道路の 前を 食ひ止められ いる
カーに 備つて 荷物を 防空壕へ 出す。月形 脇の 大黒子 在り
彼 琴似へ 行つた。射の 杯あり G.I.の 機械 樹力で
燃えよ 家は どんどん 破壊 されゆく。と しゃう 大丈夫 じゃい
G.I.一流の 仕事 消火 作業は 徹行 して いる。四時半 鐘 止
先ず ビールの 馳走に なる 喝 いて いるので 正に 快調 ぶり!
次に 握り飯。ホット ケーキ。夕方の 甘い 物は 馳走に なる
就中 大福餅 何れも 美味 かつ。何ぞか 応援に 来るとか
食ひ 来ると いる 分は ない。大村 帰来 又 風呂へ 入り
飯を 食つたら 満腹! さて 日記を つけよう

昭和三十年十一月以降観映録

そよみかぜ (小説) 札幌日活館

海の子 (小説) (大映) 同右

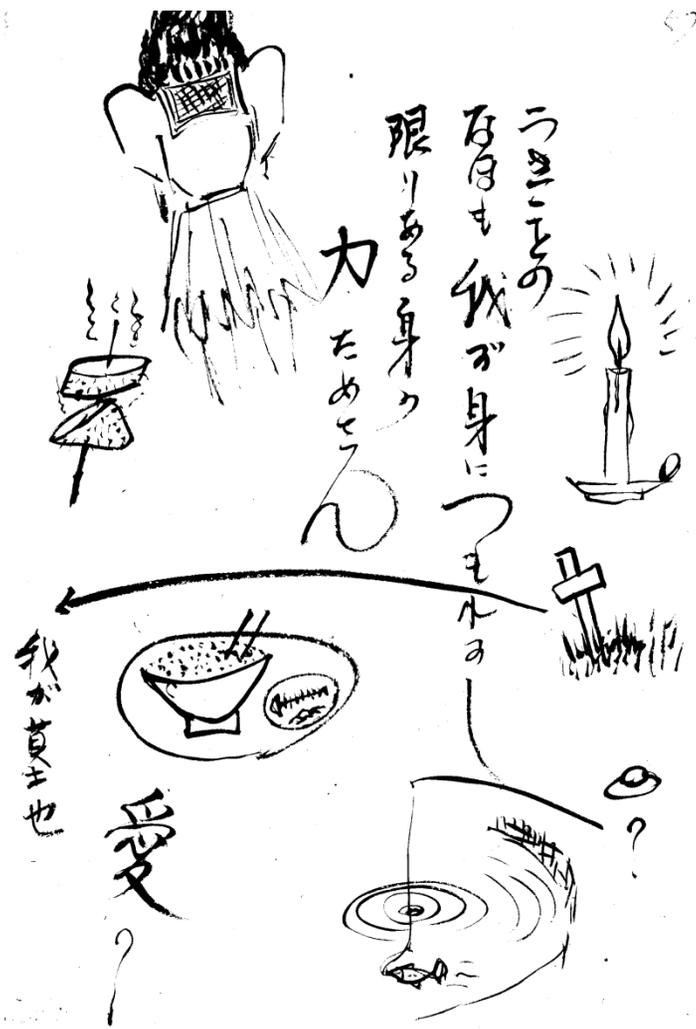
狐と鬼と赤坊 (東京) 札幌東京映劇 11/22

神変麝香猫大会 (大映) 日活館 11/23

新婚お允け屋敷 (東京) 札幌東京

三味線武士 (大映) 古同 11/

軽音象大会 ミマス館ノ



北海道帝國大學惠迪寮

南寮五号室住人

順天院敬人
一夢大居士

(世稱 細野眉葦)